

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

6期—8号



2005.12.21

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01
From the President/Masaru MAENO

特集 イコモス第15回総会西安大会 02
Feature Issue on ICOMOS 15th General Assembly and Scientific
Symposium in Xi'an

総括／西村幸夫 02
Inclusive Comment on the ICOMOS General Assembly and
Symposium in Xi'an/Yukio NISHIMURA

委員会・専門部会 報告／岩崎好規、杉尾邦江 02
Reports on the science committees/
Yoshinori IWASAKI, Kunie SUGIO

イコモス総会・シンポジウムの感想・意見 04
杉尾邦江、岩崎好規、福島綾子、大野 渉、井上 敏、片方信也、
山崎正史、赤坂 信、大河直躬
Remarks on the ICOMOS General Assembly and Symposium/
Kunie SUGIO, Yoshinori IWASAKI, Ayako FUKUSHIMA, Wataru OHNO,
Satoshi INOUE, Shinya KATAGATA, Masafumi YAMASAKI,
Makoto AKASAKA, Naomi OHKAWA

事務局日誌 10
Diary

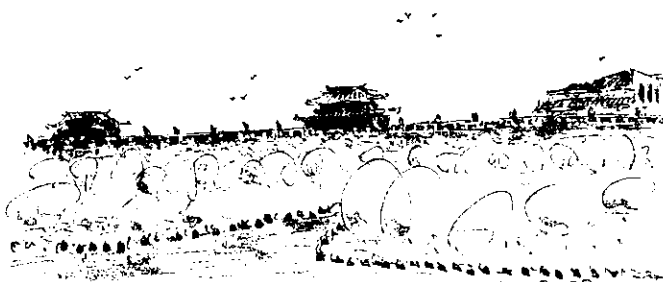
はじめに
前野まさる



今年は阪神淡路大地震から10年目の節目に当り、年頭から「神戸国連防災世界会議」が開催され、あわせてICOMOSのICCORN（文化遺産防災専門委員会）の「アジア・環太平洋地域文化防災専門家会議」が京都で開催されました。これは益田先生が中心になって企画されたもので、清水坂の自治消防隊のボランティアの組織活動を話と実演で見せていただきました。海外からの参加者に清水寺周辺の住民が地域防災に尽くしている様子がわかり、良い企画でした。

2月には韓国ICOMOS・日本ワークショップ委員会共催で北朝鮮も交えた「高麗開城の文化遺産的価値と保存」のワークショップ、5月にはソウルでICOMOSアジア地域会議、8月には日本・ブルガリアICOMOS共同事業のワークショップ。この事業は石井昭顧問第5小委員会主査のお骨折りで推進しているもので、そのご苦勞は察して余りあるものがあります。

10月には西安で第15回ICOMOS総会、日本からは16名の多数の参加がありました。伊藤先生の名譽会員推挙はめでたく承認され、岡田先生の執行委員選挙は、中国の郭副委員長候補、韓国の李執行委員候補、アジアしかも隣国3国の候補が競り合うので心配しましたが、この3国と連携し3国とも無事当選、めでたしめでたしでした。しかし、これからはこの3国ICOMOSと連携して活動していく必要があり、皆さまのお力添えをお願いしたいと思います。



石井昭 2005.10-20.11.11

イラスト(全て)／前野まさる

特集 イコモス第15回総会西安大会

今号は、理事会がなかったため、理事会報告はないが、本年10月に開かれた第15回ICOMOS総会に出席した会員からの報告や感想、意見を特集する。まず、はじめに今期間までイコモスの副会長を務めた西村幸夫氏に西安大会の総括をしていただき、各委員会に参加された会員諸氏からの報告、また総会に参加して思うことなどをまとめたものを掲載し、読者諸氏にその大会の雰囲気をお伝えしたいと思う。

総括

西村幸夫

2005年10月17日から21日まで、中国の古都、西安において第15回のイコモス総会が開催されました。同総会には少なくとも75カ国から1000人を越す参加者が集まり、イコモス史上、もっとも盛大かつ成功した大会だったと言えると思います。イコモス中国国内委員会のこの総会にかける意気込みも並々ならぬものがあり、歓迎行事や祝宴は私たち日本人の想像を超える盛大なものでした。一説によるとこの総会開催のために中国側が準備した予算は200万ドルにのぼるということでした。

大会では日本から次期執行委員として岡田保良先生がめでたく高得票で当選されました。また、中国とオーストラリアから副会長が選出され、韓国からも執行委員が選ばれるという日本のみならずアジア全体にとってうれしい結果となりました。さらに伊藤延男先生が名誉会員に推挙されるという、日本のイコモス国内委員会にとって関野克先生のガゾーラ賞受賞に続く記念すべき場面もありました。

また、総会最終日に遺跡記念物のセッティング(周辺環境)保全に関する西安宣言が採択され、単体としての遺跡や記念物のみならず、その置かれた環境にまで配慮すべき旨の主張が正式に謳われたことも特筆に値すると思います。とりわけ開発のスピードが速いアジアにおいては、この西安宣言に盛られた主張は保全主義者にとって非常に重要な後ろ盾になると思います。

総会と同時に開催された国際科学シンポジウムも予稿が600編近く集まるという盛況で、会場で発表の荣誉に浴することができた論文は投稿総数の3割程度という狭き門でした。

私個人としては、1993年のコロンボ総会以来、ソフィア(1996年)、メキシコ(1999年)、マドリッド(2002年)、ジンバブエ(2003年)と連続して出席してきた末の今回でしたが、3期9年間、執行委員及び後には副会長として活動してきた国際組織を満期で退任するという記念すべき総会でした。また、国際シンポジウムのテーマをセッティングにすべきであると主張して本部

に受け入れられ、シンポジウムの趣旨説明を総会初日に任され、さらにセッティングに関する西安宣言のとりまとめの責任者として任命されたばかりか、ガゾーラ賞及び名誉会員の選考委員長、総会のラポーター・ジェネラルまでやらされるという大変に忙しい総会でもありました。

とりわけ、西安宣言のとりまとめは、最終稿までに大きなもので3、4度、細かい修正を加えると12、3度以上の練り直しがあり、英語のネイティブにニュアンスをチェックしてもらいながら、フランス語と中国の翻訳(特にセッティングという語の翻訳そのもの)に気を配るという大変神経を使う仕事でした。さらに、総会最終日の宣言草案の説明とそれに続く総合討論では、司会進行をしなければならず、どんな反対意見が出るかと心配しておりました。果たせるかな、総合討論の場で、私が草案を説明し終わるやいなや複数の手がさつと上がり、冷や汗をかきましたが、意見はいずれも宣言草案を評価するもので、その早期実施を求めるものやいくつかの項目の付加を求めるという建設的なもので、胸をなで下ろした印象が今も残っています。

委員会・専門部会 報告

ICOMOS International Scientific Committeeに出席して

岩崎好規

私の専門は地震地盤基礎系であるが、soil や foundationに関する科学委員会はない。後述するように、文化遺産のオーセンティシティは上部構造においては議論されているが、基礎系についても議論する必要があると思われるので、この問題をどこかで議論してみたいと思っていた。前野会長にお伺いを立ててみると、まずはstructureの委員会からスタートすればという助言を得て、このStructures of Architectural Heritage委員会に出席した。さらに地盤工学的な観点からみると、基礎問題系の不都合や不安定、斜面崩壊などが文化遺産の保存に対する主要な原因を構成していることから、Risk Preparednessにも出席した。



リスク対策委員会 (Risk Preparedness)

まず、10月18日の夜7:30から9:30までのRisk Preparednessに出席した。ここには、日本からは保守本流の立命館大学から出席されていた。リスクの中でも戦争などの人為起源によるものや、津波とか台風、地震とかの自然起源によるものもある。対自然の中でも、地震に対する問題などは、構造系の問題であるので、structureの委員会との連携はあるのかという質問をしたところ、ないという返答であった。議論を続けるうちに、リスクの委員会と構造の委員会の間の連携があるほうがよいという結論となって、次の日の構造の委員会に出席した際に、私が構造系の委員会に伝えてみようということになった。

建築遺産構造委員会 (Structures of Architectural Heritage)

本委員会は翌日の19日、午後19:30から開催され、出席者は次のようであった。

Chairman Pere Roca Fabregat(Spain)

Member: Lyne Fontaine(Canada), David W. Look(USA), Predrag Gavrilovic(Macedonia), Stephen Kelly(USA), Edgar Urban (Mexico), Fernando Espinosa de los Monpenos (Spain), Juhani Penttinen (Finland), Yoshinori Iwasaki (Japan)

この中で直接の知人はいなかったが、共通の知人が居た。ペンティンミッコ (フィンランド) は、国際地盤工学会で文化遺産建築の基礎の補強が専門のフィンランドの私の友人を知っていて、この委員会に参画する予定だといっていた。私が参加していた日本国政府アンコール遺産修復だが、マケドニアのガヴリロヴィッチは、アンコールでのWorld Heritageのチームの一員で、地震が専門、さらに、カザフスタンのアルマトイの地震工学研究所の所長と友人であるという。カザフスタンの所長とは、1月前の9月中旬に大阪で開催した第16回国際地盤工学会にも出席していた旧友である。出席はしていなかったが、ユネスコ専門家アンコールでの友人クローチェ (イタリア) も話題の中にのぼっていた。

前回のバルセロナにおけるリコメンデーションをさらに詰めようということが主要な議題であった。修復原理(principle)は一般的であるが、実務としての手法論(guide line)になると地域別のいろいろな特種なものがあるので際限がない。まずは、修復原理だけにしぼってまとめる必要があるという主張があったが、特に反論もなかった。また、ユネスコが関与する遺跡保存サイトへの専門家としての積極的な関与ができないかという議論もあった。リスク委員会と構造委員会の連携問題を持ち出して議論してみると、構造物の耐震性などに関しては、構造委員会とリスクの委員会にとっては共通のテーマであり、両委員会間のコミュニケーションが大事であるという結論であった。

基礎における真正性 (オーセンティシティ)

イタリアのピサ斜塔の傾斜対策については、1960-70年代にいろいろと対応策が考案され、主として基礎にどのような対策を講じるかということが議論されたが、当時基礎の真正性ということは問題にされなかった。

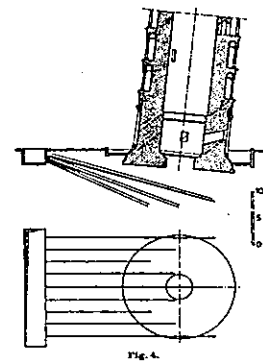


図-1 地盤抽出による斜塔矯正法¹⁾

1990年代となって、ピサの斜塔は基礎直下の地盤を抜き取ることで抜き取った側の地盤が圧縮沈下することで、傾斜を戻すことができた。地盤抽出法(soil extraction method)である。ここでは、Authenticityという観点から考察してみよう。

図-2に3つの場合をしめしたが、左は地盤抽出法、中央は杭(アンカー)によるもの、右は杭により支持しさらにほぼ傾斜をゼロにしたものである。

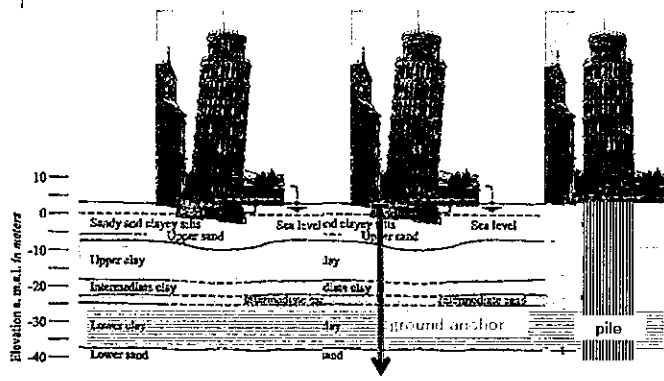


図-2 ピサ斜塔の保存対策における基礎部の比較²⁾

上部構の傾斜構造という特性を維持している点では、左と中央は上部構における Authenticity は維持しているが、左と中央を比較してみると、その違いは基礎構造における Authenticity ということの説明できよう。

このような事例で明らかのように、その基礎構造の遺跡文化財としての真正性の問題があるということが分かる。この問題については、第16回国際地盤工学会 (ISSMGE; International Society of Soil Mechanics and Foundation Engineering) の技術セッション “歴史遺産の保存 (Preservation of Historic Sites)” で取り上げられたが、今後、ICOMOS との共同的討議を進めることを提案したところ、賛成を得た。

今後は、ISSMGE の TC19 (Technical Committee on Preservation of Historical Sites) と ICOMOS の Structures of Architectural Heritage との連携の場を設定し、基礎および地盤に関する問題を共同で討議することができればと思っている。

Reference

1) F.Terracina, Geotechnique, Vol.12(4), pp.336-339, 1962, Institution of Civil Engineers, London, U.K.
 2) Y.Iwasaki, General Report, Preservation of Historic Sites, Vol.IV, Proceedings of the 16th International Conference of Soil Mechanics and Geotechnical Engineering, 2005(to be published)

「文化の道」委員会報告

杉尾邦江

私は Cultural Route (CIIC) のメンバーなので18日19日両日の夜開催された会議に今回アソシエイトメンバーに推挙された大野渉氏と出席した。

主な議題は次の通り

- ① CIIC 役員選挙、新メンバーの入会検討と紹介
- ② Cultural Routes 憲章 (第5次) の検討
- ③ 次回ミーティング

① について、日本からアソシエイトメンバーで加入希望の大野渉氏がアソシエイトメンバーとして認められた。以降大野氏は活発に議論に参加し有効な意見を述べられた。

② 役員選挙は当日あらかじめ登録された候補者への投票と同時開票が行なわれ、会長1名、4各地域の副会長3名の副会長補佐、事務局が選出された杉尾は再びアジアパフィフィック地区の副会長補佐に選出されました。尚、会長職は多忙を極めるため会長補佐を改めておく事となった。

会長は圧倒的多数でこれまでどおり、マリアローザ女史が選出された。

③ 第5次 Cultural Routes 憲章案の検討が行なわれたが、英語、スペイン語、フランス語の3言語のニュアンスの違い等、用語のそれぞれの言語による解釈が異なり、検討は極めて困難、会員全員による検討は至難の業、従って、各自持ち帰り検討し、来年のミーティングまで持ち越しとなった。

④ 来年のCIICの会合の開催国はアルゼンチンで承認された。

イコモス総会・シンポジウムの感想・意見

イコモス総会に参加して

杉尾邦江

標記大会に10月17日からの総会、18日から19日の2日間に亘って行なわれたシンポジウム、選挙、視察に出席したので、以下に報告いたします。

① 総会

会場のセッティング、組織的運営のスケールは今まで類を見ないものであった。誠に、滞り無く進行されたと感じた。

本部役員選挙では日本代表の岡田氏がエグゼクティブコミッティに堂々の投票数を獲得されて当選された。副会長の選挙は波乱にとんでいた。以外な結果となり



私としては誠に残念な結果であった。

② Scientific Symposium

2日に亘って行なわれた、私は第4分科会の Cultural Route: "The Challenge of Linear Settings for Monuments and Sites" に参加し1日目、コーディネーターのマリア・ローザ女史の総合スピーチのあとの2番目に "A consideration on the definition of the setting and management protection measures for cultural routes" を発表した、尚、事前にこの第4分科会の申し込み発表論文の査読を行ない46論文の選出も行なった。分科会はこれまでになく非常に盛況、且つ活発であった。

ICOMOS 西安交遊録

岩崎好規

イコモスの西安大会に出席しようと思ったのは、昨年のアジア会議に出席して中国の思い入れのほどが伝わったからでもあるが、兵馬俑を見たいと思ったからだ。旅行のホテルの予約は苦労した。各ホテルに FAX, E-mail を入れるが、なんの返答もない。結局別ルートの予約サイトから確定したあと、“人民ホテルから、部屋はあいている” という悠長な返事がきたりした。この中国式は昔からだろう。国際会議での楽しみの一つは、古い友達と会い、新しい友人を作ることである。イコモス系の会議は、私には、昨年のアジア会議から2回目であるが、会長のペッチェット氏とは、アンコールで初見、パーミヤーンのユネスコ専門作業委員会でも議論を重ねた仲でもある。韓国の金光植（キムカンシク）氏は、アジア会議の私の発表の際、希望する人には日本国政府アンコール遺跡チームの年次報告書を送呈すると発言したあと、アンコールの JSA 報告書がぜひ欲しいと要望された最初の人である。アジア会議のあと、彼が奈良に来た際と私が韓国に行った際に酒を共にした仲である。金氏はポストコンファレンスツアーにいくという。私の持っていた世界の歩き方“シルクロードおよび西安”というガイドブックを見てぜひ貸してほしいということだったので、金氏は日本語に堪能であり、旅の安全祈願も含めて最終滞在していたホテルのフロントに預けて進呈した。後日、長文の電子

メールをよこしてきて、長時間の汽車の楽しい旅などを記してきた。

もう一人、メキシコの VALERIA PRIETO 女史（メキシコ自治大学）も、北京会議で初見の人であったが、昨年松山での“町並み保存会議”に出席した後、京都でお会いしてみると、なんと“Tuboniwa 坪庭”ということばが発せられた。さらに聞くと、彼女の娘さんが、数年前、京都に留学して“坪庭”の研究をしていて、しばしば娘のいる京都にやってくる、滞在したのだという。2005年9月に開催した大阪の国際地盤工学会でメキシコの大聖堂の不等沈下の修復に関するパネリストとして最適な地盤工学者を探したときに、彼女に多いに助けってもらった。イコモスの大会では、あまり自由な時間がなかったために、これらの友人とさらに交友を深める時間もなく、ただ、言葉を交わすに終わったのが残念であった。しかし、新しい友人も出来た。今後もイコモス会議には楽しく友達と過ごしたい。

その昔 仲麻呂も見し 月出でて

西安城壁 夢のまた夢

ICOMOS 2005 西安に参加して

福島綾子

今回は私にとって初めてのイコモス総会および Scientific Symposium 参加であった。参加の動機は、Scientific Symposium で論文発表を行おうと考えたことである。私が今年度から関わっている、金沢工業大学と(株)キャドセンターとの共同研究は、今回のシンポジウムメインテーマである“Monuments and Sites in Their Setting”とも深く関わり、シンポジウムに対して何らかの議論や材料を提供することができるのではと考え、発表を行なった。発表内容の詳細は、今後イコモスのウェブ等で公開されるであろう論文集を見ていただきたい。

今回参加しての感想は、ありきたりではあるが、やはりイコモス総会以上に多くの国々の多数の文化遺産保存関係者と出会える機会にはない、という一言に尽きる。私が若干驚いたのは、私の世代のような若手の研究者、専門家の参加が思ったよりも少なかったことである。出張扱いなどにならない限り、どこの国で開催

されようとも、イコモス総会参加にはかなりの額の経済的負担がかかるが、より多くの若手専門家が積極的に参加し、交友や知見を広める機会としてイコモスを活用すべきだと感じた。例えば、若手専門家に限ったイコモス総会参加のための資金サポートの制度や、学生など若手研究者を対象とした論文のawardなどを創設してみてもどうか。

イコモスとは直接関係はないが、西安は私にとっては大変馴染み深い、懐かしい土地である。5年ほど前のユネスコ北京事務所に勤務していた時期に、西安の唐長安城大明宮含元殿遺跡では、ユネスコ日本信託基金による保存整備の長期プロジェクトが行なわれ、私はその事業調整を担当し、西安にもしばしば訪れていた。約5年ぶりに西安を訪れ、当時仕事仲間であった西安市文物局の友人達にも再会することができ、温かい歓迎を受けたことが本当に嬉しかった。遺跡整備はすっかり完成し、日本政府の文化遺産無償による資料館も完成していた。5年前には遺跡周辺に多数のレンガ造の民家があったが、恐らく数百軒には上と思われるそれら民家が遺跡の周辺環境整備のため全て撤去されていた。遺跡—観光—市民の生活環境—行政の関係は、これからの中国ではきっとまた変わってくるのだと思う。イコモス総会の主催なども、そのひとつのきっかけになるかもしれない。どのような変化があるのか、注目していきたいと思っている。

ICOMOS 第15回総会に出席して

大野 渉

私は、ICOMOS総会に出席するのは始めてであり、目的の半分は総会の様子を見学することであった。開催地の西安を訪れるのも初めてで、世界遺産の兵馬俑や唐代の遺跡を見学するのを楽しみにしていたが、まず驚かされたのは、空港敷地内に準備された「ICOMOS歓迎」の大看板であった。次に、空港から会場のホテルに向かうバスのなかから見るまちのあちこちに同様の看板やポスターが貼られているのに驚かされ、その後も大々的な歓迎レセプションなど中国西安市の歓迎振りは最後まで驚くばかりであった。今回の総会は

ICOMOSの40周年に当たる記念すべき会合で、途中ICOMOSの歴史を振り返るプレゼンテーションなどがあり、これまでのICOMOSの歩みを確認するとともに、特に世界遺産条約に関する文化遺産の諮問機関としてこれまで以上の責任を持って新たな役割を果たしていく必要があることを認識する会であったと思う。日本ICOMOSの先生方とともに、このような総会に出席することができ非常に勉強になったし、Cultural RouteのSettingをテーマとした第4セッションでの自分の発表も無事終えることができた。また、Cultural Routeに関するScientific Committeeにも無事Associate Memberとして迎えられ私には実り多い経験だった。色々トラブル話の多い選挙では、日本ICOMOSからの出席者として一票を投じさせていただいた。多少のトラブルを覚悟して望んだものの、中国側が準備した自動集計システムは特に問題もなく、順調に選挙は進められたが、それでも長時間にわたるものとなった。数票差で当否が分かれたExecutive Boardに立候補された岡田先生は無事当選され、一方で、これまで副会長を勤められてきた西村先生が任期を終えられ執行部を退かれることとなった。西村先生、本当にご苦労様でした。

ICOMOS 西安大会に出席して

井上 敏

今回初めて大会に出席させていただきました。前回は所用で参加できませんでしたので、今回は中国・西安での開催という距離的な近さもあり、是非参加させていただきたいと思っていました。当初は大会の全日程に参加するつもりでしたが、…結局月曜日に所用が入ってしまい、火曜日出発、水曜日からの参加となってしまいました。そのため、発表は1日しか聞けず、それについてどうこう言えませんので、選挙について思ったところを書かせていただきたいと思います。

今回は国士舘大学の岡田先生が委員として立候補されておりましたので、応援も含めて参加したいと考えていましたが、更にICOMOSのような国際機関の選挙というのはどのように行なわれるのかということも興味がありました。特にこれだけの多くの国々の人々が



参集し、どのように投票し、その結果がどうなるのか、という点で、大変興味がありました。例えばICOMOS執行部に入る委員はヨーロッパとそれ以外の地域では人数の上で不均衡な結果になるのか、つまりヨーロッパ中心の人選になるのかという点などです。選挙結果からみると、この点は私が考えていた以上に投票者は地域のバランスを考えているように感じました。

一方で、気になったのは日本からの会員の参加の少なさです。今回は中国での開催ということもあり、投票場での中国人立候補者への応援や中国人の多さは大変目立っていましたが、あまりにも日本人が少ないことに驚きました。現在、文化財保護分野での日本の国際貢献は大変目覚ましいものがありますが、ICOMOSにおける日本の立場はまだだと思えます。日本の会員がICOMOS大会に参加しないことが国際貢献していないことになるというわけではありませんが、あまりにも日本からの参加者が少なく、西村先生や前野先生をはじめ奮闘していただいている先生方に大変申し訳ない気もしました。前回欠席した私が言うのはおかしいかもしれませんが、是非、次回以降の大会に日本の会員の皆様には積極的ご参加いただきたいと思えます。そのことがまたICOMOSにおける日本の立場を高めていくことになるような気がします。

Scientific Symposium を中心にした印象

片方信也

今回のイコモス総会への出席は、ブルガリア、メキシコについて3度目でした。総会、Scientific Symposium (わたしはSection 3に参加)の出席者も多く、21世紀初頭の世界の流れの反映を感じた総会であったと思えます。Scientific Symposium Section IIIのテーマは、Evolving townscapes and landscapes within their settings: Managing dynamic changeで、40本を超える報告がありました。町並み、景観の変化を周辺の環境を含めトータルに把握し、どのような目標に向かっていかにコントロールするかということがこのSectionの課題でした。

報告をきいていると、各国の歴史都市、自然遺産をめぐって社会、経済的な条件がいま大きく変わりつつあ

り、観光開発など商業的な開発の圧力との葛藤が繰り返されていることがよく分かります。変化をどのように受け入れていくか、この点ではある発表の質問でも保全のマスタープランを優先するか、それとも市民参加を優先するかという論点を提示する討論者もいました。また、近代都市計画が遺産の保全にどのように関わって来たか、今後の役割は何かという論点も浮かび上がっていたのですが、十分な論議はありませんでした。

遺産保全の歴史の中で、近代都市デザインの遺産(キャンベラに関するレポートがありました)も守るべき対象として評価する時代になってきていることは意義あることとは思いますが、とくに歴史的都心など既存の歴史的遺産の危機的状況の中で、このような近代の都市デザインの破壊的な強制に重たな責任があることはこれまでもイコモスは厳しく指摘してきたことです。たとえば、キャンベラについてもより望ましいトータルな人間環境として成熟してきたのかどうかについては疑問もあり、深く検討する必要があると思えます。

ケベックでの16回総会に向けて、近代都市計画、都市デザインに関するイコモスの見解の歴史的な発展を改めてたどり、今後も予想される歴史的都心などの破壊的動向をよく分析して、これに対応する各地の遺産保全のプログラムに関する情報交流を活発にする必要があると思えます。近代都市デザインの流れがそのまま新自由主義的な開発指向へとシフトしており、今回はこうした新たな認識に立った歴史的遺産保全の方策を各国、各都市で検討する必要があることを実感した次第です。

ICOMOS 総会参加報告

山崎正史

もう20年以上も経ったが、ローマで開催された第6回総会に傍聴者として参加したことがある。今回は総会に参加する2回目であった。ローマではずっとごちんまりした会議で、当時はフランス語中心で英語は肩身の狭いもので驚いたのだったが、今回は規模も比較にならないほど大きく、英語が公式語という感じで、その

変化にまた驚いた。

多くの人に出会い情報を得て大変勉強になったが、それはさておき、意外であった感想を2点報告したい。

ヨーロッパの歴史都市景観保全は立派だが、同じ方法では人口増加のつづく発展途上国では困難（支障もきたす？）ではと思い、反面教師という側面はあるものの、京都の融通性のある町並み保全事例紹介を用意していった。しかしアジア、アフリカ、中南米などの発展途上国からの参加者は極めて少なく、私の発表は意味がないかと落胆した。ところが、ヨーロッパの発表に幾つもの、歴史都市が新しい高層ビルに脅かされている事例や、新しいデザイン進出の問題指摘など、今になって「開発と保存」問題が露呈してきているような報告があったのである。かねてから、ヨーロッパはいくらか米日風に傾くだろうし、一方少なくとも日本は都市計画をヨーロッパ風に近づけるべきだと考えているが、前者の想像は既に始まりつつあるように思えた。日本における景観保全のための困難な経験も、ひょっとしたらこれからヨーロッパにも参考になるかもしれない。

もう一つの感想は、発展途上国からの参加者が少ないことである。敢えて言えば、ICOMOS が果たしてこのグローバルな時代に「国際会議」というべき体裁を備えているのか、という疑問である。ヨーロッパのとはまではないものの、ヨーロッパ中心の会議というのが率直な印象である。夜に「都市と村の保全」というテーマの分科会のようなものがあり出席したら、ヨーロッパの人たちが（いかにも内輪で、という感じで）次の分科会を何市でして、誰々に世話してもらおうといった話ばかりで、数名出席していたアジアからの参加者はさっさと退席してしまった。そういう会議が必要としても、運営には疑問を感じた。

政府代表者の会議なら予算もついて、発展途上国間の国際会議も可能であろう。しかし、ICOMOS のように多様な職能に従事する人からなる各国国内委員が会議に参加するには旅費と参加費の問題があるのではないだろうか。為替レートの問題も大きい。各国からの参加者数名ずつの小規模なものでもいいから、スポンサー付きで、文化遺産保全に関わる官民専門家の情報

交流と協力の、出来れば定期的な、国際会議開催を開催できれば…と思いつつながら帰路についた。

前野先生はじめ日本から参加された皆様にお世話になりました。お礼申し上げます。

イコモス総会・シンポジウムに参加して

赤坂 信

中国の西安市におけるイコモス総会の際に開かれた Scientific Symposium では10月18～19日の2日間にわたり、Monuments and Sites in their Setting: Conserving Cultural Heritage in changing Townscapes and Landscapes を大テーマとし、各国から数多くの論文が発表された。セクションは4つに分かれ、Section I は Defining the setting of monuments and sites: The significance of tangible and intangible cultural and natural qualities (このセクションではさらに1st session Introductions、2nd session Urban dimensions、3rd session Landscapes、4th Session Various approaches、5th Session Archaeology and Case studies と5つのセッションに分かれている)、Section II は Vulnerabilities within the settings of monuments and sites: Understanding the threats and defining appropriate responses、Section III は Evolution townscapes and landscapes within their settings: Managing dynamic change、Section IV は Cultural routes: The challenges of settings for monuments and sites となっていた。筆者はセクション II か III を希望していたが、結果としてセクション I の3rd Session の Landscape で “Advocacy of Vista-Heritage: The important Role of Viewing to Mountain for setting in Japan” を発表することになった。内容は世界遺産の首里城から東方1kmの弁ヶ嶽への眺め、東京都内の富士見坂からの富士の眺め、福島県の東小富士の雪形「種まきウサギ」の眺めの事例を通じて、これまでの「もの」の保存から、眺望という行為を保障する「状況」の保全する Vista-Heritage を提唱するものである。実際の発表では、福島県の東小富士までいかずに時間切れで終わってしまったが、質問が出たので、回答する機会に東小富士の話も補足することができた。発表後、Vista-Heritage に関心を持った何人かから質問があり、趣旨を理解してもらったのが嬉



しかつた。今回の大テーマ setting は、保存の対象がこれまでのように明確で具体的なものとは異なって、ずいぶん曖昧でなにか薄まった論議を展開していたかの印象もあると聞いたが、確かにこれまでとは違うのだろう。あたかも「中心」ではなく、その「周辺」を語るような。しかし、これまであまり考えられなかった、いやむしろ軽んじ、避けてきた議論だったのではないだろうか。イコモス総会は初めての参加だったが、setting というテーマにさまざまな国からこれだけの知恵の結集をみたのは感動的であった。

シンポジウムのテーマ Setting と西安の現実

大河直躬

西安での総会は、私が出席したソフィア大会以降の総会のなかで、地元政府がもっとも力を入れたものでした。一日目の行事の後の、復元された南門での大美女軍団によるパフォーマンスや、兵馬俑の展示施設と復元大明宮基壇の壮大さは、長安を訪れた遣唐使一行もおそらくそうであったように、私を圧倒しました。しかし、シンポジウムのテーマである保存における Setting の重要な役割という観点から見ると、西安で進行中の保存は、残念ながら Setting を無視して、正反対の方向に進んでいると思いました。

シンポジウムでは、第1セクションに参加しました。テーマが大きかったせいか、議論が拡散したまま終わった感じです。それでも、ポーランドの A.Tomaszewski の「セッティングの観点から見ると、ベニス憲章はアテネ憲章から後退している」という意見に、時代の変化が見られました。

私はセッティングとモニュメントの関係の歴史的变化を検討し、今後の課題を提起しました。私の見方はまだ少数意見ですが、休憩時間に何人かの人から賛意を表されて、西安まで来たかがありました。

総会終了の翌日、壮大な保存プロジェクトの印象の口直しにと、市内の古い庶民の町を訪ねました。幸い、宿泊したホテル古都新世界大酒店のすぐ裏手から古い町並みが始まります。地図を見ると、ホテルの前を東西に走る蓮湖路と南方の西大街の間の地域はT字路が多

く、バスが走る大通りは1本もありません。この地域を歩いて通り抜けることにしました。

蓮湖公園(唐代の池の名残で、京都の神泉苑に似た位置にある)を見て、その西門を出ると、白い丸帽子(男)とスカーフ(女)の人々が多いイスラム教徒の町です。幅の狭い通りに沿って食堂・小商店・工房が並び、タクシーの間をオート三輪・リヤカー・荷車がすり抜けてゆきます。まもなくイスラム寺院の清真寺の脇に出、さらに進むと北院門通りの北端に出ました。南端の鼓楼までは立派な清代の店舗などが並んでいます。途中でお菓子やお茶を買いましたが、中心部の観光客相手の店とは違い、店員の対応はととても親切で、若い女性の店員には、京都の西陣などの歴史の古い町で見るとような恥じらいの感じがあります。長い間使わなかった「含羞」という言葉を思い出しました。

碑林博物館まで歩き、帰りは西大街を通るバスに乗り、鼓楼を過ぎたあたりで下車して少し歩くと、通りの北側に最近建物を取り壊した幅4~50メートル、奥行き百数十メートルの空き地を見出しました。その奥に寺院の門らしいものが見え、それに向かって歩く人々もいるので、私も入って見ました。なんとそれが国指定の道教寺院 Chuanghuangmiao でした。明代に創建された都城鎮護の廟で、現存建物は1723年の火災後の再建です。伽藍がよく整い、おそらく国内でもっとも良く保存された道教寺院でしょう。周囲に以前は古い町家が残っていたことが、左右にわずかに残る建物などから分かりますが、修復工事では、伽藍以外のそれらはすべて取り壊して整備を行なうようです。パンフレットの修復計画図によると、門前は西大街まで大きな広場、伽藍の左右は広い並木道で、背後の大通りに抜けるようです。まさに sweeping cleansing です。

古都新世界大酒店の東側の酒金橋通りの入り口部分も、すでに建物の取り壊しが始まっていますから、イスラム街の庶民的な町並みも、少数の指定建物と保存街区以外は、まもなく姿を消すことでしょう。それとともに、あの自然な含羞を身につけた女性たちも。西安のことはさておき、日本の都市がこのような道を歩まないことを願うばかりです。

日誌 事務局

(2005年9月14日～2005年11月30日)



2005年

- 9/26-10/7 Ancient Plovdiv Conservation Project の件で石井昭氏がブルガリアに滞在しブルガリア・イコモスと協議
- 10/6 文化財協力コンソーシアムのあり方に関する懇談会（前野委員長、矢野和之氏出席）
- 10/17-21 ICOMOS 西安総会 日本イコモスから16名参加。西村幸夫氏がICOMOS副委員長の任期終了、伊藤延男氏がICOMOS名誉会員に推挙され、岡田保良氏がICOMOS執行役員に選出される
- 10/21 ユネスコアジア文化センターより「文化遺産ニュース」vol.13 受領
[JAPAN ICOMOS INFORMATION]第6期7号発行 維持会員を含む全会員、関係団体に順次送付
- 10/24 広島県港湾企画グループ主催 田中英治氏、吉田晋司、福山市河川課長 横山光昭氏、日本ICOMSを訪問。
架橋、埋立ての説明
- 10/31 21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」並びに国連防災世界会議パブリック
フォーラムシンポジウム講演集「文化遺産を災害から守るために」を受領
ユネスコ協会連盟より「ユネスコ」2005,11 vol.1100 受領
- 11/7 (財)ユネスコ・アジア文化センターより「文化遺産ニュース」vol.9,10,11,12,13を受領
- 11/17 広島県議 浅野洋二氏、福山市議、藤井真弓氏が日本ICOMOSを訪問、鞆の浦問題の協議
ユネスコ・アジア文化センターより ACCU news no.352,2005,11を受領
- 11/26-29 ICOMOS 学術委員会委員長マハット氏、CIAV前副委員長ルイス教授、韓国ICOMOS金光植教授 の3氏来日、
鞆の浦視察及び福山市、広島県訪問、鞆の浦港の保存申し入れ



日本イコモス国内委員会 維持会員（代表者）

株式会社 尾田組（尾田芳信）	株式会社 鴻池組（大岩祥一）
株式会社 総合計画機構（糸谷正俊）	株式会社 都市環境研究所（矢嶋啓自）
株式会社 乃村工藝社（乃村義博）	株式会社 ブレック研究所（杉尾伸太郎）
株式会社 文化財保存計画協会（矢野和之）	「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会（有賀正）
株式会社 トリアド工房（伊藤民郎）	西武建設株式会社（松下和徳）
株式会社 京都科学（片山保）	（敬称略・願不同）

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO
Vice President	副委員長	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		町田 章	Akira MACHIDA
Secretary General	事務局長	矢野 和之	Kazuyuki YANO
Trustees	理事	赤坂 信	Makoto AKASAKA
		稲葉 信子	Nobuko INABA
		岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
		小野 昭	Akira ONO
		河野 俊行	Toshiyuki KONO
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA
		西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
		濱崎 一志	Kazushi HAMAZAKI
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		宮川 朝一	Asaichi MIYAKAWA
		山田 幸正	Yukimasa YAMADA
		渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors	監事	沢田 正昭	Masaaki SAWADA
		西谷 正	Tadashi NISHITANI
Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
		伊藤 延男	Nobuo ITO
		坪井 清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		稲葉 信子	Nobuko INABA
		石井 昭	Akira ISHII
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Member	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野 昭	Akira ONO
	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
Analysis and Restoration Structures of Architectural Heritage	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本 功	Isao SAKAMOTO
	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
Historic Towns and Villages	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
	上野 邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage Training	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
	稲葉 信子	Nobuko INABA
	工楽 善通	Yoshimichi KURAKU
Historic Gardens and Cultural Landscapes	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中 眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野 まさる	Masaru MAENO
	大野 敏	Satoshi OHNO
Wood	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤 延男	Nobuo ITO
	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Architecture	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
	石井 昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry		
Cultural Routes	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
	石崎 武志	Takeshi ISHIZAKI
Risk Preparedness	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
Rock Art	小川 勝	Masaru OGAWA



JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.6, No.8 21 DECEMBER 2005

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 赤坂 信

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-9-6 アストウルビル3階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax .03-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel & Fax .+81-3-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp